

地域再生デザイン研究

研究代表者 古谷 誠章
(創造理工学部 建築学科 教授)

1. 研究課題

近年、日本の社会では、産業構造の変化、少子高齢化の進展、人口移動による地域社会の高齢化等の社会経済情勢の変化に従う地域社会構造の変化が見られる。2009 年、本研究室で行った都市再生プロジェクト推進調査の対象である島根県、雲南市は、人口減少により 6 町村の合併により誕生した市である。雲南市、特に市の周辺部となる地域では、地域社会構造の変化により官庁舎や公立学校舎など遊休公有施設が多く生じている。また市内全域で、公有施設の利用率の低下も問題になっている。このような住民の生活から分離していく地域環境の変化は地域社会の沈滞や住民の居住環境の悪化につながる。また、地域社会構造変化と共に計画される新たな施設は既存の施設との関係を持たないまま建設され、既存施設が立地する地域の孤立、機能の重複による資源浪費による環境問題も考えられる。

これらについては旧町村界を超えた広域的な地域づくりの推進、住民の生活構築の観点から当初の公有施設の目的を見直しながら地域住民のニーズを踏まえた効果的な用途転換及び活用する観点からとらえた具体的設計指針の改革が不可欠となっている。

本研究では、今後のこの問題に意欲的に取り組もうとする地方都市からの委託により、具体的な実践を伴いながら、社会経済情勢の変化と共に地域がもっている価値を見直しながら住民の生活が続けることが可能な地域再生デザイン手法の模索と提案を行う。

2. 主な研究成果

- 2-1. 新潟県上越市 月影小学校 / 千葉県鋸南町 保田小学校における廃校リノベーションの研究 提案
- 2-2. 島根県雲南市 中山間地域での地域と大学生等による交流ゾーン形成事業
- 2-3. 金網を使った身体スケールの空間デザインの研究
- 2-4. 香川県小豆郡 空き家活用モデル事業
- 2-5. 奈良県 吉野材(スギ・ヒノキ)を活かした木質空間デザインの提案
- 2-6. 高知県宿毛市 林邸再生・活用事業研究
- 2-7. 岐阜県美濃加茂市 旧伊深村役場庁舎再生活用基本デザイン策定業務

2-1. 新潟県上越市 月影小学校 / 千葉県鋸南町 保田小学校における廃校リノベーションの研究提案

月影プロジェクトは2017年度で13年目を迎えた。地域再生のために「宿泊体験交流施設/月影の郷」における継続的な関わりと周辺地域・学生を巻き込んだ活動を目指した。

特に継続年数が10年を超えた現在、今後どのように地域との関係を築いていくかが課題となった。鋸南プロジェクトは2017年度で5年目を迎えた。廃校になった旧保田小学校は改修され、2015年12月に、「都市交流施設・道の駅保田小学校」として開業した。2017年度は建築学科として空間活用やまちづくりなどより実践的な課題に取り組んだ

2-1-1

月影プロジェクト

(1) 「宿泊体験交流施設/月影の郷」のファサードルーバーの交換

ルーバーを交換することで、月影の郷は夏の風通しを良く、冬は雪の入り込みを防ぎ、建物内部を快適にすることが可能になる。地域住民と交換を行う事で今年もより深い関係を築く事ができた。

fig.1 植樹を行い夏の日差しを遮るカーテンを作る fig.2 ルーバー交換後の様子



(2) 月影の郷 サイン計画、看板交換 「かまくら交流フェスタ」への参加

2017年8月からはインバウンド需要に向けて、英語併記や分かりやすいデザインなどを工夫した月影の郷内のサイン計画、看板作りを行った(fig.3)また2018年2月には月影の郷で開催される地域の祭り「かまくら交流フェスタ」に参加し、雪を使ったドームの製作などを行った。(fig.4)

(fig.3)サイン計画、看板作り

(fig.4)「かまくら交流フェスタ」の様子



(プロジェクトチーム撮影)

2-1-2

鋸南プロジェクト

(1) 廃校利用を核とした生涯活躍のまちづくり実施計画への応募

・本プロジェクトでもこれまで関係してきた道の駅保田小学校の存在も踏まえ、廃校活用を軸としたまちづくり計画策定業務に取り組んだ。

(2) 廃校利用を核とした生涯活躍のまちづくり実施策定後の取り組み

実際にまちづくりに関わる過程で、町内関係者が今後のまちづくりに関してどのように捉えているかヒアリングを行った。また鋸南町の住民を対象としたワークショップにも取り組み、ヒアリングと合わせて実際に必要とされる公共建築改修後の機能や、現在町で課題となっているものはなにか明確にしていく作業を行った。住民との対話の中で、町の中でも地区別に抱える問題が異なることや、廃校活用が望まれていることなどが分かった。

fig.1 ワークショップのフライヤー fig.2 ワークショップの様子



(プロジェクトチーム作成・撮影)

2-2. 島根県雲南市 中山間地域での地域と大学生等による交流ゾーン形成事業

島根県雲南市と早稲田大学古谷誠章研究室の連携、平成 29 年度遊休施設を活用した交流促進ゾーンの形成を目的とし、雲南市の様々な場所で遊休施設の調査・地元学生、住民とのワークショップ・提案を行う。昨年度に引き続き木次町でのさくら祭りにおけるメインストリートの空間形成の提案、吉田町の商工会館を中心に周辺の空き家や地域資源を調査、その他、他地域においても、祭りやワークショップなどに参加することで、中山間地域での交流を図る。

2-2-1. さくら祭り2017

2017年度のさくら祭りでは市役所の方々と様々な議論を通してさくら祭りを盛り上げることに真摯に取り組んだ。また、今までの活動で作成に取り組んだ建具を活用するなど蓄積を活用した取り組みも行った。



fig.1 祭りの様子（古谷誠章研究室 撮影）

2-2-2. UCC キックオフ合宿

雲南市全体をキャンパスと考え、大人チャレンジ・若者チャレンジ・子供チャレンジを行うことができるような体制を整備していく事業の一環として、全国から大学生が集まり1泊2日で自分のことを振り返り、雲南市で何ができるか、自分がしたことは何かを考える合宿に参加した。今年度の早稲田大学の学生チームとしては10年間携わる中でどの様に雲南市の状況が変化し、今何が求められているのか明らかにすることを通年の目的として掲げていた。そのような状況を一緒に調査することで地域活動で協議していきたいという趣旨の元、UCC合宿の中で他大学学生からの協力を募集した。



fig3. UCC ミーティング時の様子
（古谷誠章研究室 撮影）

2-3. 金網を使った身体スケールの空間デザインの研究

現在、金網の多くは「商品」ではなく、「資材」として出回っているのが現状である。7割が土木工事用資材、残りの1~2割が建築用資材として。「資材」としての金網には、発注時の製作寸法の自由度や工場での高い生産性などのポテンシャルが見込まれている。一方、専門性のない一般利用者にとってその優位性は自分たちの生活とは遠い存在となっており、金網製品の認知度は低いと言わざるを得ない。今回「資材」ではなく「商品」としての金網の使い方を課題とした背景には、大量販売が可能であり、なおかつ将来の販路拡大が見込める「商品」にこそ、今までとは異なる新たな金網の価値があるという製作者の強い意志が込められている。技術者たちが積み重ねてきた厚い歴史の中で凝り固まってしまった従来のマーケットを変えるような提案を期待する。

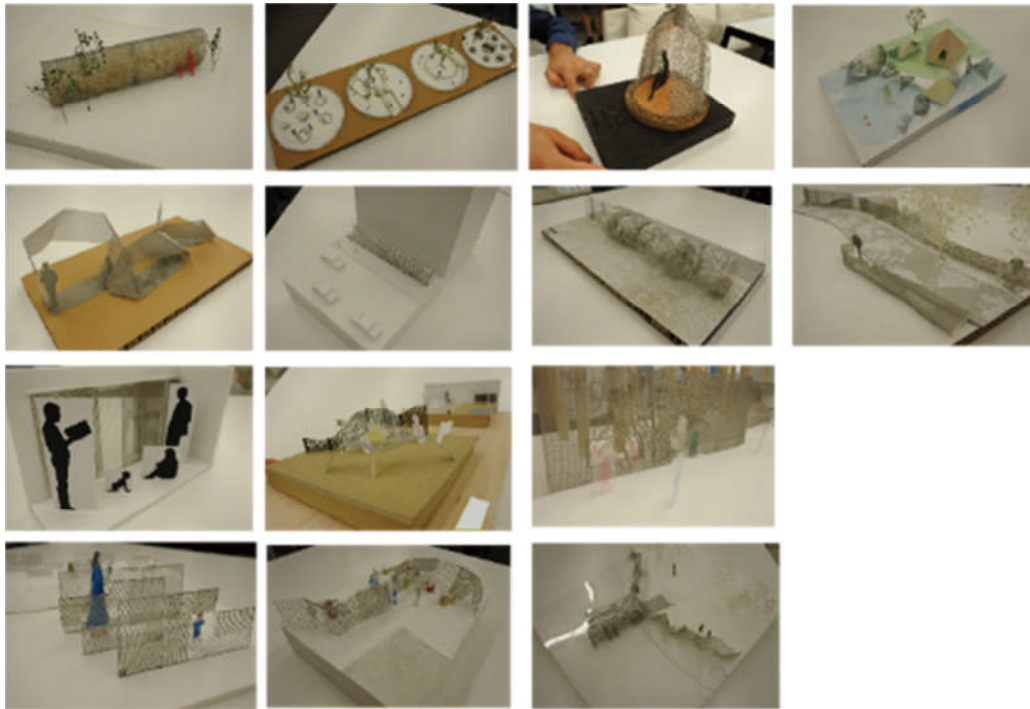
2-3-1. コンペティションを通した提案

金網を使った身体スケールの空間デザインの研究において、製作するアイデアを選定するため、『金網を使った「みんなが集まる柵」のデザイン提案』という課題のもと、産学コンペティションを開催した。

課題内容は、「柵」というと、一般的には何かを囲んで外に出ないように閉じこめたり、人が近づかないようすにするものであったりと、何かと何かを隔てるもの、つまり基本的には何かを“排除”する考えが根本にはあるように思います。しかし、ここでは隔てたり、排除したりするだけではなく、むしろみんなが集まることで、「柵」が本来の役目を果たすことを考えること。例えば、山と民家の間に設けるイノシシの獣害柵では、人が柵の周りに集まることで、イノシシは人やその匂いを嫌い柵に近づきません。公園の遊び場に設置されているこども用の柵であれば、柵の近くに大人が集まることで、こどもの見守りも同時に行われます。どのようなところで使われるのか、何のための柵か、常設か仮設かなどは、各自が設定して、デザインして下さい。

この課題を考えるヒントとして、金網という素材や形の利点について考えること、「柵」に人が集まるためには、「柵」としてだけではなく、人が集まるための他の機能を付加させ「あぁもなる・こうもなる柵」も考えてみて下さい。」というものである。

各学生により、合計14組（うち個人9名、グループ5組）の発表が行われた。その中より「風ニモ波ニモ」が選定され、今後の提案の基礎となった。



（古谷誠章研究室 撮影）

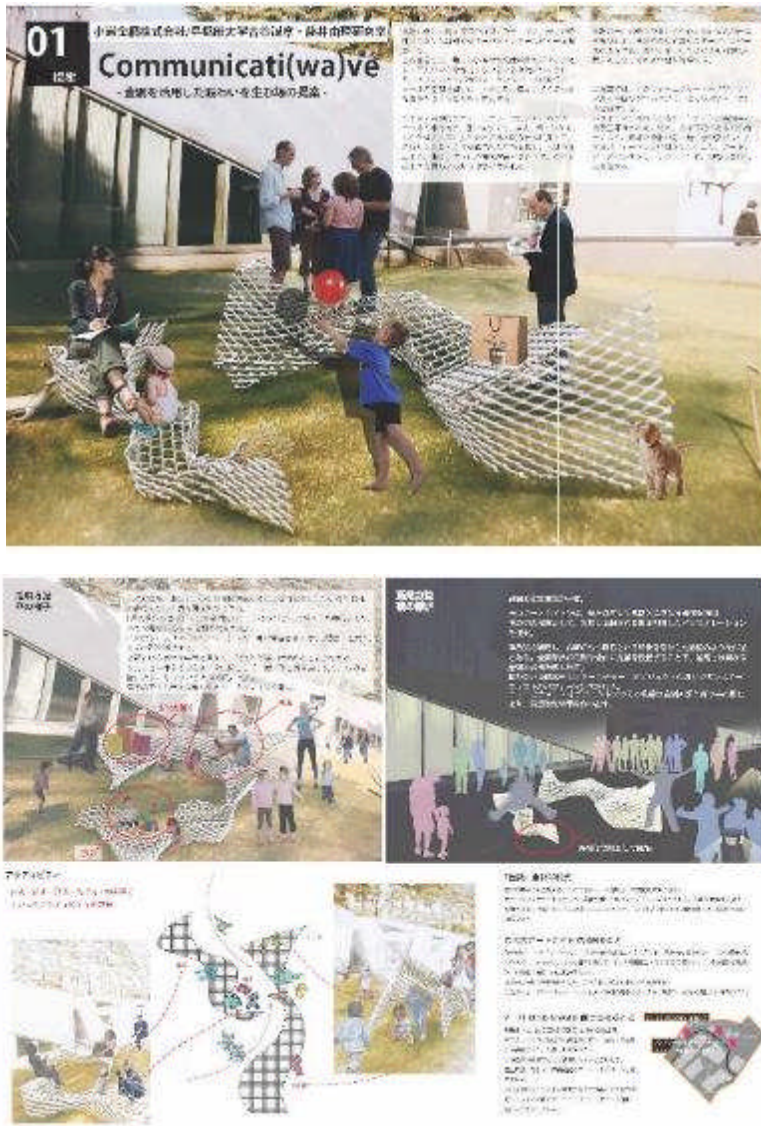
2-3-2. 産学コンペティションにおける学生の提案

金網を使った「みんなが集まる柵」を企画、同時に企画書(A3 片面印刷7枚)、を作成した。金網を使った「みんなが集まる柵」は、金網の新しい利用方法の再発見をテーマに、素材の特性を生かした曲線的なアーバン・ファニチャーとして提案した。この作品では、柔らかい波の様な曲線的なデザインインによって人の所作を誘発するいろいろな場所づくり出した。それによって都市のオープンスペースに身体スケールの空間を創出し、人が自然と集まってくる小さな場所をつくることを目的とした。

作品名は Communicati(wa)ve- 金網を活用した賑わいを生む場の提案 - とした。

企画書は、1枚目にタイトルと目次、2枚目にメインパスと概要の説明、3枚目に昼夜の活用方法とアクティビティ、場所性の説明、4枚目に図面、5枚目/6枚目/7枚目に活動紹介、という構成にした。

以下にその内容の概要を示す。



(企画書：Communicati(wa)ve- 金網を活用した賑わいを生む場の提案 - 古谷誠章研究室 作成)

2-4. 香川県小豆郡 空き家活用モデル事業

高齢化、空き家の増加が進む一方で移住者の転入が見られる香川県小豆郡小豆島町堀越地区において、堀越地区が今後どのような地区になっていくべきかを住民と検討し、現在全国的な問題となっている空き家活用の手法やデザイン提案を行うことを目的としている。

2-4-1. 未来の堀越分校プロジェクトへの取り組み

本年度も堀越地区をモデルとして空き家活用の可能性を継続的に調査し、堀越、ひいては小豆島全体の文化・資源の継承を主目的として、以下の3点を重視した活動を行った。

- ①既存のリソースを失う危機の回避
- ②島宿真里の堀越参入による、堀越への来訪者増と小豆島の文化発信の契機
- ③来訪者増によって堀越地区および小豆島全体に生じる移住希望者や利益と相乗効果

堀越地区には、「壺井繁治の生家」「教員住宅」「分教場跡」という三つの壺井栄に関するリソースがある。しかし、これらは堀越住民のみでは維持・管理しきれておらず、いずれ朽ちて失われてしまうことが予想される。「教員住宅」を、小豆島町が継承・活用していく価値があると考えられる。さらには壺井繁治の生家や分教場跡も、今後の整備・活用が好ましい。上述のような継承・活用を目指すにあたって、今年度の島宿真里の堀越参入がそのバックアップになりうる。現状、自立した経済の流れや集客力の低い堀越に、島宿真里が参入することで、一定の集客が期待される。そしてその観光客や来訪者にとって、このような施設群は小豆島の文化に触れる良い機会となる。更にはそれが堀越地区の魅力増になり、集客力増・移住促進が相乗効果によりさらに高まりうる。

上記の内容をふまえ、今年度は住民とのワークショップによる教員住宅の活用方法の検討、住民へのヒアリングに基づく空き家調査、島宿真里との意見交換や弊研究室の活動の共有等を行なった。



fig.1 堀越地区住民とのワークショップ



fig.2 堀越地区空き家調査（古谷誠章研究室 撮影）



fig.3 堀越地区マスタープラン提案

2-4-2. 地区行事への参加

四季に合わせて開催される各地区行事に参加し、各祭事の魅力を引き立てるような制作物の提案・制作を行った。

古谷研究室では、平成 26 年度から堀越地区の地区行事への参加や提案を継続して行なってきた。本年度は、これまでの成果や、祭りの概要や来歴、発見した魅力などをまとめ、これから堀越地区に入ってくる島宿真里へと伝えるためのシートを作成した。このように、活動の蓄積やそこからわかったことをアーカイブ化していくことで、将来的な移住者や観光客へ、堀越の文化を発信・継承するツールとなることを展望とし、今後も継続を試みる。



fig.5 納涼祭の誘導灯となる竹キャンドル
(古谷誠章研究室 撮影)



fig.7 敬老会で配布した堀越の風景ポストカード

2-5. 奈良県 吉野材(スギ・ヒノキ)を活かした木質空間デザインの提案

吉野材の魅力を最大限に活かした新しいブランドづくりを推進し、県の林業・木材産業の振興を図ることを目的とし、吉野材の魅力を最大限に引き出す木質空間としての新しい用途の調査及びデザイン開発を行う。昨年度に引き続き首都圏に重点を置き、吉野材（スギ・ヒノキ）の空間デザインの提案を行う。奈良県内での木材活用として吉野以外の地域の林業や奈良県産材の視察を行うことで、吉野材だけではなく奈良県全体で抱えている林業・木材の知見を得る。

2-5-1. HOUSE VISION 2016 東京展

吉野材の魅力を最大限に活かした新しいブランドづくりを推進し、県の林業・木材産業の振興を図ることを目的とし、吉野材の魅力を最大限に引き出す木質空間としての新しい用途の調査及びデザイン開発を行う。昨年度に引き続き首都圏に重点を置き、吉野材（スギ・ヒノキ）の空間デザインの提案を行う。奈良県内での木材活用として吉野以外の地域の林業や奈良県産材の視察を行うことで、吉野材だけではなく奈良県全体で抱えている林業・木材の知見を得る。

2-5-2. 代官山蔦屋書店 奈良の木フェア

代官山蔦屋書店で行われた「奈良の木」のある暮らし～森からの贈り物～において GARDEN GALLERY でデザイン発表の機会を頂いたことから、「普段吉野材に触れる 機会が少ない代官山に訪れる方々へどう発信するか」を学生間で議論し、工務店や 家具デザイナーなど様々な方にご協力いただき提案・製作を行った。「木でできた家」という設計コンセプトは、吉野材のもつ温もりや大らかさを容易に 想像でき、都心の多様な暮らしの中でより広域に接続できる媒体になり得ると考え、奈良県の吉野材、林業の素



晴らしさを都会の日常の暮らしの中で体感できる提案となった。



fig.1 制作物

fig.2会場の様子 （古谷誠章研究室 撮影）

2-5-3. 上北山村での天然林活用提案

上北山村の天然林や林業、木材を視察し吉野地方以外の県産材についての知見を深めることで、吉野材の位置づけを再認識できた。これは吉野材、ひいては奈良県産 材を活用したデザイン提案の可能性を研

究する足掛かりとなった。上北山村に対しては、天然林含め周辺の視察を経て、吉野の人工林とは違う、奈良 県南部に広がる山間部の自然林や木材の活用、更にはそれによる村の活性化を狙い とした提案を行った。現地調査や住民の方々と意見交換会を行いながら、上北山村の魅力や課題を対話の 中で整理してゆき、特有の地形が生み出す資源と、生業、文化を結びつけ山と村を 横断しながら構想を練った。また、熊野文化や信仰など、地域ならではの要素を現 代に活かしながら地域の問題を解決する手法を模索した。

2-6. 高知県宿毛市 林邸再生・活用事業研究

①概略

宿毛プロジェクトは宿毛市商工観光課の依頼を受け、宿毛市林邸の改修・活用計画を行うものである。「林邸」(fig.1)は、政治家林有造の邸宅として明治 22 年に建築され、近代日本で初めて 3 代続けて大臣を輩出、建築学的にも隆盛だった自由民権運動の系譜を物語る建物として宿毛市民に親しまれているが、築後 130 年以上が経過し老朽化が著しい状況(fig.2)にある。

そこで、建物の歴史的価値を尊重した改修を行いながらも、本市の観光拠点、市民の交流拠点として日々活用できるような再生計画の研究・実現を行った。



fig.1: 林邸正面玄関



fig.2: 林邸 1 階天井現状 (古谷誠章研究室 撮影)

②再生活用デザイン (機能)

改修にあたっては現代の仕様に耐えうる機能・耐震性能を付加しながらも、林邸に残る建材・家財道具や風格を出来る限り尊重することで、その歴史的・文化的な価値を次代に継承することを目指した。改修方針としては、林邸を大きく二つに分け、1 階西側と 2 階を「文化的改修」部分、1 階東側を「現代的改修」部分とした(fig.3)。

「文化的改修」とは、現代の使い方に耐えられるように耐震改修や最低限の変更を加えながら、古材を最大限活かし歴史的空間を復元的に改修することである。この部分はコミュニティースペースや展示スペース、事務室などとして使われる。



「現代的改修」とは、現代の新しい使われ方に必要な新たな機能を付加するために大幅な改修、増築を行うことである。この部分は飲食物販スペースやキッチンスペース、トイレなどとして使われる。

fig.3:改修方針を示した平面図(古谷誠章研究室 作成)

その提案過程においては、市民の方との意見交換・ワークショップを頻繁に行った(fig.4)。その中で得られた意見を設計案に取り込むこと、竣工後に市民の方が林邸の使い方を自発的に提案し活用していくことがねらいである。また、「志国高知 幕末維新博」第二幕開幕までの極めて短い工期の中で、こうした成果が反映されるようデザイン監修することも古谷研究室の大きな役割として担った(fig.5)。

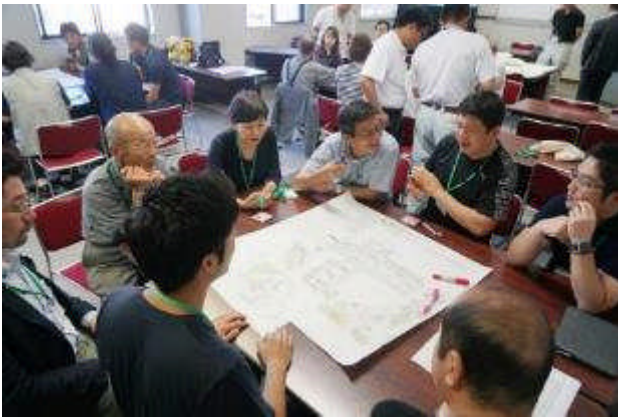


fig.4:ワークショップの様子



fig.5: 林邸正面(改修後)(古谷誠章研究室 撮影)

③再生活用デザイン(構造)

現在の建築基準法の耐震基準に合わせるには大掛かりな耐震補強が必要であったが、むやみに壁を増やすと広々とした雰囲気損なわれる懸念があった。そこで、東京大学大学院木質材料学研究室の稲山正弘教授とその学生と共に、透明な強化ガラス耐力壁(fig.6)と、新たな伝統的空間を創出する組子細工耐力壁(fig.7)の研究を行い、両者を使い分けることで、林邸の持つ開放感を活かす耐震改修を行った。



fig.6：強化ガラス耐力壁

fig.7：組子細工耐力壁(古谷誠章研究室 撮影)

④竣工・オープン

2018年4月21日には、林邸の一般オープンを迎えることができた。当日、地元の住民や地方建築家など多くの人が訪れ、林邸の展示や歴史的・文化的な痕跡を見るだけでなく、各自が自由に居場所を見つけ、くつろぐ姿が多くみられた。改修された林邸が地域の方々に自然に利用されることで、林邸を自分たちにとって愛着のある居場所として認識し、使いこなしていただけることが期待出来る (fig.8-13)。



fig.8：オープン当日の様子（縁側）



fig.9：オープン当日の様子（カフェ）



fig.10：林邸の新しい顔となる飲食、物販スペース



fig.11：林邸にまつわる資料のある展示スペース



fig.12：北庭 座敷、展示スペースが取り囲む

fig.13：南庭 キッチンスペースと一緒に使える
(古谷誠章研究室 撮影)

2-7. 岐阜県美濃加茂市 旧伊深村役場庁舎再生活用基本デザイン策定業務

昭和11年に伊深村(現伊深町)の村役場として建設された役場庁舎は、町村合併後、地元民がサークル活動などで利用する集会場として活用されたが、2014年に施設の老朽化により一般の利用が禁止された。今後も地元住民や外部の人々が集まり、まちに賑わいをもたらす場となるよう、旧村役場の活用方法ならびに基本デザインを提案する。

2-7-1. 旧伊深村役場庁舎 活用を考えるワークショップ

地域の人々の意見を計画に取り入れるためワークショップを数回にわたり開催し、改修計画の参考とした。基本設計の段階では、古写真を収集し、かつての役場の姿や使われ方を調査した。あわせて他地域の事例を紹介しながら、現在の伊深地域にとってどのような機能が必要か意見を抽出した。実施設計の段階では、イベントの運営や施設の愛称な、施設の使いこなし方について地域住民と案を出し合い、実際の設計にフィードバック。また施設に併設されるカフェの運営者とも話し合いを行い、地域の要望を伝え、それを最大限受容できる施設運営を可能とするための設計を心掛けた。

2-7-2. 改修デザイン提案

地域の文化財として価値ある歴史的な要素を抽出し、形を残すことで地域の記憶の継承を行った。また、老朽化した構造部には筋交いではなく、垂れ壁で耐震補強を施すことで、既存の空間の構成を維持した。そして施設一帯を地域の交流拠点となるカフェとして現代的に更新した。



fig.6 改修した役場の外観

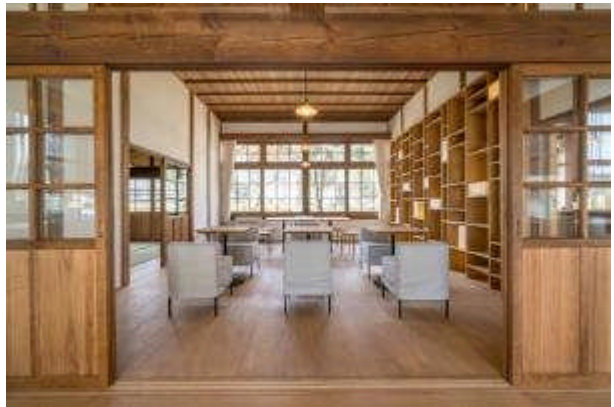


fig.7 改修した役場の村長室



fig.8 改修した役場の執務室

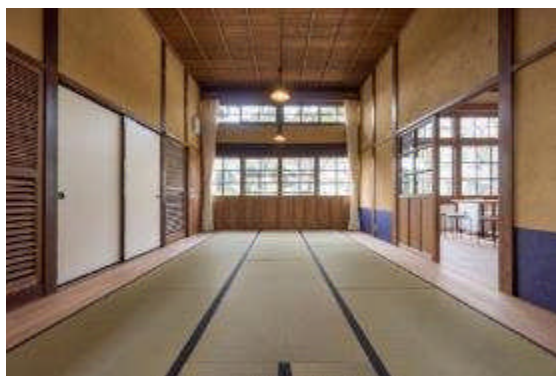


fig.9 改修した役場の会議室

(古谷誠章研究室 撮影)

3. 共同研究者

斎藤 信吾（創造理工学部・助教）

根本 友樹（創造理工学部・助手）

山田 浩史（創造理工学部・助手）

王 薪鵬（創造理工学部・助手）

4. 研究業績

特になし

5. 研究活動の課題と展望

5-1. 新潟県上越市 月影小学校 / 千葉県鋸南町 保田小学校における廃校リノベーションの研究提案

鋸南町は今年度まちづくり計画策定業務に関わったことで、よりまちづくりや建築改修など建築的な側面に関わることが可能となった。上越市では他校の学生との関係が築かれ、より地域に根ざした提案が可能となった。今後はより過疎化の進む上越市と、移住者が多く首都圏から近い鋸南町それぞれのまちづくりに対し長い年月を見据えた建築的協力や研究のありかたを検討していく予定である。将来的には2地域に学生を媒介としてなんらかの繋がりが生まれることも視野に入りたい。

5-2. 島根県雲南市 中山間地域での地域と大学生等による交流ゾーン形成事業

都市再生モデル調査以来、古谷研が雲南市に関わって10年目になる。昨年度までに築いてきた様々な関係性を発展させること、それを地域に還元することを目指して今年度の活動は行った。いつか古谷研が関わらなくなった際にも地域が更新されていくことを目指しているが、現状そのような活動は少ないと感じている。毎年行われている活動や行事はあるが、それらを連携・更新していく必要がある。さくらまつりは良い例として挙げられる。今後どのような関わり方をしていくのか、引き継いでいくのかを検討・実践していくことが課題として挙げられ、その先に地域活性化がある。

5-3. 金網を使った身体スケールの空間デザインの研究

本年度は新しい金網を使った柵の提案ということで、学生の幅広い発想を公募したことで、金網の

イメージにとらわれない作品が出てきた。今後も金網だけでなく、様々な場面や素材で新たな使い方を発見し、実用化できるように取り組む必要がある。

5-4. 香川県小豆郡 空き家活用モデル事業

次年度以降教員住宅改修に向けて活動に取り組むべき行なっていくこととなる。住民・行政との意見交換会を行う中で今後の課題が明らかになっていった。

まず一つ目は「教員住宅の施設としてのあり方」である。将来的に教員住宅を改修していくにあたり、より地域の人々の需要に適した施設を作り上げていく必要が有る。そのため、適切に住民の方々からの要望を汲み取りながら、それを反映した施設を構想していくことが大切な課題となってくる。

次に空き家を利用しやすい仕組みづくりを行なっていくことも課題となった。移住者の方が移住しやすい仕組みや、空き家の所有者が空き家を貸し出しやすい仕組みを小豆島町役場、NPO 法人、専門家の人たちと話し合いを進めながら模索していきたいと考えている。

最後に堀越地区の空き家の現状を把握することである。現状として今すぐに使えそうな空き家が堀越地区にどれだけあるのか、加えてそれらの空き家の所有者にアンケート調査を実施していくことで、現実的にその程度の数の空き家が本事業の計画の対象となりうるのかを明白なものとしていきたい。

5-5. 奈良県 吉野材(スギ・ヒノキ)を活かした木質空間デザインの提案

来年度以降も更に吉野材の魅力を活かし、より汎用性や専門性を高めた展示や空間を目指し研究を深めることで、吉野材の魅力や実空間への使用の利点を伝えることができると思う。首都圏等での吉野材展示キットや短期的なイベントブースの導入による普及は今後も販路拡大という意味では有効であるため邁進していきたいが、吉野材でできた空間の導入が可能となる提案として、上北山村での自然林活用した提案が、現実のものとなっていくことで木材を活用した建築デザイン提案の研究が可能となるのではないかと考える。今後も今年度と同様に「蔦屋 T-site gallery」等首都圏に重点をおいた活動と、奈良県内における PR 活動並びに空間提案を同時平行で重ねて行くことで、吉野材を取り巻く環境や吉野材のブランド力の向上、更には林山地の活性化を図り、その利用拡大につなげていきたい。

5-6. 高知県宿毛市 林邸再生・活用事業研究

林邸の再生活用デザインの目的や方針、また技術などを先駆的な取組として広く共有・発信することで、林邸の価値が認知されるのみならず、日本各地に点在する歴史のある他の建築が早計に取り壊されることなく活用されることを期待している。

5-7. 岐阜県美濃加茂市 旧伊深村役場庁舎再生活用基本デザイン策定業務

今年度開催したワークショップで伊深の方々から多くの意見をいただいた。改修に反映できたものがある一方で、北側のデッキなどハードとして反映していないもの、映画の上映会や音楽イベントなどソフトとして取り組みが必要なものも多々あるため、来年度以降これらの実現可能性を検討する必要がある。また、改修をしてオープンするカフェの運営に関して、市民との交流を促すような提案や補助、まちづくり活動が必要である。更に今年度ワークショップを行っていた伊深交流センターが今後改修される可能性があるため、機能分担を行いながら、旧伊深村役場庁舎のカフェを拠点とした、ここでしかできないまちづくり活動を検討する必要がある。